

目次:

1) より優れたサービス提供のための集約：新しい CTL オフィスについて	1
2) FD 活動レポート	
- グループ学習で英語の課題をサポートする試み	4
3) 学修・教育支援	
- Academic English Support (Proofreading) について	5
4) セミナー研修レポート	
- 「日本の高等教育機関における障害学生支援に係るリーダー育成海外研修」参加報告	7
5) 役立つ ICT ツール	
- ICT を活用した授業支援 (事例紹介)	10
6) 新任教員紹介	13
7) 編集後記	20

より優れたサービス提供のための集約：CTL オフィスについて

2018 年 4 月、学修・教育センター (CTL) はオスマー図書館 1 階に場所を変え、新たにオープンしました。これまで学内に点在していた学修支援、教育支援サービスの機能が一つのフロアに集約され、図書館という恵まれた環境の中で、学生のサポートと教員のサポートを同じ空間で効果的に行うことができるようになりました。新しい体制における今後の CTL の可能性について、オルバーグ センター長、小瀬 副センター長からのメッセージです。

オルバーグ・ジェレマイア
学修・教育センター センター長

CTL の引越しが行われました。CTL は、オスマー図書館の 1 階に移動しました。CTL によりホームができたと言っても過言ではありません。活動開始から 4 年が経ちましたが、すべての部署を一つの建物に集約することができました。これにより、2014 年に設置された鈴木寛教授率いる「CTL に関する学長諮問委員会」が当時から考えていた CTL のビジョンが実現することになります。当初のアイデアは、サポートを受ける側と提供する側の双方にとって物事をより簡単かつ効率的に行うため、教員と学生のそれぞれに対して存在していたサポートサービスを物理的に統合す

ることでした。

2015 年 4 月に ILC の 2 階に初めてオフィスを構えた当時、CTL にはファカルティ・ディベロップメント、TES、およびその他の学生サービスやデジタルメディアサービスの専門の職員がいました。アカデミックプランニングオフィス および特別学修支援室は別の建物にあり、ライティングサポートデスクは CTL の一部ではありませんでした。決して理想の形ではないまでも、学部および大学院における教育的ミッションをサポートするため、一つの組織として一丸となることができました。



新しい CTL オフィス

発足後最初の 2 年間にあった大きな進展の 1 つが、本館にある「まどぐち」の設置です。これ

は、学生や教員が CTL に訪れるのを待つのではなく、CTL が学生の元へ赴くという試みでした。職員の方々は、寄せられた質問に返答できないのではないかという不安や懸念を乗り越え、サービスの成功のために懸命に対応してくださいました。熱意をもって、サポートを待つ人々に対応して下さった方々に感謝いたします。

このようにして「まどぐち」は成功を収めたのですが、これは思い描いていた方法とは異なる形での成功でした。まどぐちには、日々質問や解決すべき課題が山のように押し寄せましたが、そのほとんどは学修支援とは関係のないものだったのです。質問や課題は、むしろ落とし物や教室の空調温度、騒音などの問題で占められていました。どれも重要な問題ではありますが、CTL の主たるミッションではありませんでした。

現在、CTL は教員および学生が勉強をするために集まる場所である図書館にあります。オスマー図書館 1 階の大部分は「ラーニング・コモンズ」として使われています。テーブルや椅子のほとんどは軽くて移動式であり、グループで使用する際は、使いやすいようにテーブルを再配置することができます。また、グループで使用可能なグループ学習室 (AV 機器が使用可能) を 2 部屋用意しています。このように、使用可能なサービスや CTL の職員を、学生たちにより身近に感じてもらうようになりました。

特に、図書館の地階から 1 階上に移動し CTL に加わったライティングサポートデスク (WSD) は、学習中の学生からより見えやすい位置になりました。これをきっかけに、より多くの学生たちがサービスを利用してくれることを期待しています。担当スタッフの松木さんも、引き続きライティングチューターをサポートしてまいります。加えて、Academic English Support および Proofreading サービスも継続して提供します。卒業論文を英語で執筆している学生にとっては、特に価値があるサービスです。



アカデミックプランニングオフィスはダイアログハウスから移動し、それに伴い IBS も活動の多

くを図書館で行っています。ここでも、このようなオフィスが学生たちを図書館に引き寄せ、そして図書館を訪れた学生が今後サービスを活用してくれることを期待しています。また、ワークショップや学会が開催できる小規模の「イベントスペース」もあります。もちろん現在でも、必要に応じて他のオフィスを紹介することがあります。今後も引き続き、カウンセリングセンター、教務グループ、およびキャリアカウンセリングの職員の方々と密に連携し、学生たちの成功をサポートします。

かつて ILC では「お隣さん」であったデジタルメディアサポート室も、今はそうではありません。職員は皆さんと同じ場所にいますが、今まで通りに学生サポートを行うスタッフ用にセミプライベートエリアもあります。

職員同士が視界に入ると励みや気付きにも繋がり、また、お互いが現在取り組んでいることが見えるため、助け合う方法を知ることができます。ぜひ、リニューアルされた CTL にお立ち寄りください。また、改善点などのお気づきの点がございましたら、ぜひお聞かせください。

(日本語訳: CTL)

小瀬 博之

学修・教育センター 副センター長

学修支援機能の集約は CTL の悲願でした。ILC からは CTL 本部が、ダイアログハウスからは APC (現 APS, アカデミックプランニング・サポート) が、オスマー図書館地階からは WSD が移転したことにより、図書館1階の SNSS と合わせて名実共に学修支援機能が一体化したことになります。2015 年に包括的な学修支援体制の確立を目指してスタートした CTL が今ひとつ、学生そして教員に対してなかなか縮まらない距離感を感じてきたのは、一重に地理的な利便性の悪さに起因していたと思います。この度機能が物理的に集約されたことは大きな前進ですが、それ以上に ICU 生の学びの要である図書館の一等地への移転は様々な想定外の効果を生み出していくものと期待しています。

まず、図書館は本館に次いで新入生が真っ先に利用する建物です。CTL の知名度は確実に上がっていると思われ、4月の WSD のチューター利用者数は昨年比で倍増しました。また、データ化はされてはいませんが APS と IBS (ICU Brothers & Sisters, APS 傘下のピア団体。主に学生の視点から履修相談を行っている。) への相談利用者数も増加傾向が認められています。特に IBS による履修相談以外の活動は全学的なイベントや SNS を除

くとあまり他の学生の目に触れることがありませんでしたが、先日 CTL のイベントエリアで行われた研修は自然と往来する学生の注目を集めたようです。このエリアはもう一つの学生ピア団体である、ICU Support×Support（通称さぼさぼ、SNSS 傘下のピア団体。「学修支援は与えることも受けることも等しく自然なこと」という文化の醸成に取り組んでいる）の活動拠点にもなっており、ピア団体同士お互いの様子が自然と視界に入ってくる状況が生まれています。

また、新 CTL では職場環境の改善にもなりました。ILC では DMSC 職員とそれ以外の職員が隔離された配置になっていましたが、ひとつの職場としての一体感を感じられるようになりましたし、IT / Moodle 関連の支援も専用端末に設置により円滑に教育支援ができるようになりました。さらに個人的には職員エリアからラーニング・コモンズを一望できる配置には大きな意味があると考えています。それは、さながらキッチンで作業をする親がダイニング・テーブルで宿題をする子供を見守るように、学生の学びのスタイルやニーズを感じ取ったり、声を拾ったり、異常を察知したり、より直接的できめの細かい対応に繋がる可能性を秘めていると思われるからです。既にある教員は授業内のグループ課題を CTL で行うことを奨励しています。

一方、課題としては、非常勤講師にとってはアクセスがやや不便であることが挙げられます。利用者カードがない非常勤教員は入口で毎回職員に声掛けをしなければ入館することができません。また、図書館機能と相性が悪いのが飲食の問題です。ダイアログハウスのように食べながらのディスカッションというわけにはいきません。この点幅広い意見収集と協議を重ねながら改善策を考えていきたいと思えます。

まだ新 CTL に足を運んだことがない教員の皆様、図書館で文献や資料探しのついでに是非一度お立ち寄りください。いつでもミニツアーで CTL をご案内致します。そして様々なご意見をお寄せください。CTL では授業に関するご相談（IT 技術や反転授業の導入など）、学生対応に関するご相談（成績不良学生、国際学生）など承っておりますが、新しい支援体制の構築は今後の課題です。どうぞみなさまのご協力をお願い致します。



Writing Support Desk (WSD)



ICU Support × Support “さぼさぼ”



ICU Brothers and Sisters (IBS)

グループ学習で英語の課題をサポートする試み

藤井 彰子

教育学・言語教育 département

本稿では英語の課題のサポート体制の試みについて報告したい。言語教育メジャーの 200 番台の授業「言語習得・学習」は 100 番台「言語教授法原論」で学んだ基礎的な知識を前提としており、授業形態は講義の他、専門書からの抜粋や最新の学術論文を読み、その内容について検討する。学期中に 6 回の課題が設定され、学術論文を読み、その内容を踏まえた論述やミニ調査の報告（A4 を 1-2 枚程度）が課される。中には課題に必要な英語の学術論文を自力で読むことに困難を感じる学生もいた。しかし、担当教員としては、授業時間を読み物の内容確認に使うよりは、理論的背景の講義や課題の内容についての議論に使いたかった。一方、英語の学術論文を読む力は卒業論文を書く時に必要である。ELA で学んだ基礎に実践を重ね、英語の論文を読む力をこの授業でしっかり身につけてもらうチャンスだと考えた。課題に必要な論文の内容確認を授業外のグループ学習で行ってもらおうことを計画した。

ちょうど同じ学期に大学院の実習授業である「英語教育法研究Ⅱ（英語教育法実習）」を開講していたので、チュートリアルと名付けた上記学部授業のグループ学習の指導を、大学院の授業を履修する大学院生に任せてみることにした。私自身、学生時代、交換留学生としてエジンバラ大学で学んだ時に大学院生とのチュートリアルで課題の書き方について多くの貴重なアドバイスを頂いたことが印象的だった。

大学院の授業ではまずアカデミックリーディングについての文献を読み、リーディング指導について学んだ。そして、協同学習についても文献を読み、どのようなチュートリアルにしたいか意見交換し、授業案のようなプランをそれぞれの院生が提案した。チュートリアルは 3 つの時間帯を設け、それぞれの時間帯を 2-3 人の大学院生が担当することにした。チュートリアルの時間をどのように使うかはその時間を担当する大学院生に一任することにしたが、チュートリアル後にはリフレクションノート（内省）を作成し、Moodle で共有することにした。そして、毎週の大学院の授業時間に、リフレクションをもとにチュートリアルの内容を全員で検討することにした。

学部生は都合のつく時間帯を選んでサインアッ

プした。チュートリアルは原則的には全員が参加すると考えたが、チュートリアルの大まかなガイドラインとして配布した確認のワークシートを自力でこなせる学生はチュートリアルに参加しなくても良いという「抜け道」も用意した。実際、英語のネイティブスピーカーの学生二人と 9 月生数人はチュートリアルには参加せず、ワークシートを提出した。これらの学生のワークシートの完成度は高かったので、英語の読解力があれば、専門知識が特別に多くなくても論文を理解できるはずだということを確認することができた。

チュートリアルは学部生にとって概ね好評だった。課題が難しかった分、ありがたかったのだろうと思う。大学院生は学部生がクリティカルに論文を読み解くことができるように導きたい、とリーディングストラテジーについて考え、論文の内容をまとめるための図（graphic organizer）を用意することを考案した。また、学習者中心

（learner-centered）な学びを実現するために試行錯誤を重ね、学生同士で意見交換ができるように促し、また、自らの読解力に自信が持てずにいた学生が発言しやすい雰囲気作りも心がけた。相当の準備をしてチュートリアルに臨んだことが学部生の満足度に大きく貢献したように思う。

チュートリアルの成果を数値などで測ることはしなかったが、このチュートリアルを経験した学生が今後、英語開講の授業で学習する際、あるいは卒業論文に取り組む際にチュートリアルで学んだことを応用することができればチュートリアルの意義は一つの授業の課題に留まらず、より大きな学びにつながったと言えるだろう。さらに、大学院生が目指していた学習者中心のグループ学習の経験もまた学生同士が協力し、お互いをサポートする体験としても今後の学習形式として定着すれば嬉しく思う。一方、大学院生にとっては間違いなく大きな学びの機会となり、大学院生の今後につながることを確信している。

今回のようなチュートリアルは優秀な大学院生と実習を目的とした授業があったからこそ実現することができた。ただ、他の形態でも、同じような学びのチャンスを見出すことができるだろう。今後もより持続可能な方法を求め、考えていきたいと思う。

Academic English Support (Proofreading) サービス

南 和子

学修・教育センター

AES サービス導入の経緯

ICU では英語による卒業論文（卒論）の執筆率 45% を目標に掲げ取り組んでいる。そこで、英語による卒論執筆率の促進支援に向けての施策について、スーパーグローバル大学創成推進室を中心として検討を行なった結果、卒論のプルーフリーディング・サービスを 2016 年 11 月より行うこととした。プルーフリーディング・サービスを導入することにより、以下の観点より英語卒論執筆率が向上すると考えた。

1. 教員の負担軽減：些細な英語の誤りを指摘する必要がなくなることにより、教員は卒論の内容やより本質的な部分の指導に集中できるようになる。
2. 学生の心理的ハードル軽減：英語論文執筆に対する学生の苦手意識を軽くすることができる。

2016 年 11 月より開始した AES サービスは対象を 2017 年 3 月卒業予定者とし、サービス開始当初は学修・教育センターに常駐するプルーフリーダー 1 名による面談つきでのプルーフリーディングのみであった。しかし、卒論提出時期が迫ってきた 12 月に入ると申込者が急増し面談予約が取りにくい状況が続いたため、繁忙期と予想される 2017 年 1 月 11 日～1 月 29 日の期間限定でプルーフリーダー 5 名を雇用しメール返送でのプルーフリーディング・サービスを追加した。いずれのサービスも利用率が高く、利用者の満足度も高いものとなった。2017 年 6 月卒業予定者に対しては、3 月卒業生と比較して卒業予定者も少なく利用率も低いと想定したため、面談付きのプルーフリーディングのみで対応することとし、2017 年 3 月 1 日よりサービスを開始した。

AES サービス導入から 2 年目の 2017 年度も 2016 年度同様、3 月卒業予定者には、面談つきでのプルーフリーディングとメール送付でのプルーフリーディングの二種類のサービスを提供し、6 月卒業予定者には面談付きプルーフリーディングのみのサービス提供を行った。

サービスの概要

Academic English Support は、専門のプルーフリーダーが提供するプルーフリーディング・サービスで、提供するサービスには二種類ある。

- 1) 面談つきプルーフリーディング
 - ・週 3 日プルーフリーダーが 1 名常駐
 - ・卒論フォーマットで 5 ページ（1,500 ワード）
 - ・事前にアップロードされた原稿を校正
 - ・30 分間の面談で校正内容について説明する。（対面での指導のため、その場で疑問を解消できるメリットがある）
- 2) 電子メール返送によるプルーフリーディング
 - ・卒論フォーマットで 5 ページ（1,500 ワード）
 - ・原稿を電子メールに添付し送付する
 - ・5 名のプルーフリーダーが 2 日後までに校正
 - ・校正された原稿がメールで返送される
 ※システムの関係上、コメント内容についての質問には対応しない。
 （在宅で予約、文書の受領ができるメリットがある）



CTL での面談つきプルーフリーディングの様子

AES の詳細は下記 URL を参照のこと

日本語サイト：

<http://ctl.info.icu.ac.jp/services/learning-support/aes-1#ja>

英語サイト：

<http://ctl.info.icu.ac.jp/services/learning-support/aes-1#en>

利用実績

2017 年 3 月卒業生対象

面談つきプルーフリーディング 61 件

受付期間：2016 年 11 月 8 日～2017 年 1 月 31 日

プルーフリーダー 1 名

メール返送プルーフリーディング 102 件

受付期間：2017 年 1 月 11 日～2017 年 1 月 29 日

プルーフリーダー 5 名

2017 年 6 月卒業生対象

面談つきプルーフリーディング 18 件

受付期間：2017 年 3 月 1 日～2017 年 5 月 31 日

プルーフリーダー 1 名

2017年度3月卒業生対象

面談つきブルーフリーディング 37件

受付期間：2017年11月1日～2018年1月31日

ブルーリーダー1名

メール返送ブルーフリーディング 154件

受付期間：2017年12月1日～2018年1月27日

ブルーリーダー5名

2018年6月卒業生対象（2018年5月18時点）

面談つきブルーフリーディング 4件

受付期間：2018年3月1日～2018年5月31日

ブルーリーダー1名

現状と課題

2016年度の英語卒論執筆率は35%と前年度比4%増となり、AESは一定の成果を上げている。

一方で2年目になり課題もみえてきている。

以下にAESを利用後のコメントの一部を掲載する。

AESを利用した学生のコメント

- 卒論の時期以外にも、授業のレポートなどのブルーフリーディングを利用できたら嬉しい。
- ブルーリーダーによって指導の細かさや見解に差があり、混乱してしまうことがあった。
- メール返送が早く、かつ再考の際に役立つことを指摘してくれたので満足した。
- 丁寧な添削で、英語の表現についても指導があり、論文の改善だけでなく、今後の論文執筆やプレゼンなどに応用できる知識が身についた。
- ブルーフリーディング予約が集中する時期は、学部生が優先されるということで論文の推敲が十分でなくても早く予約しなければという焦りがあった。修士学生が制限されないよう、ブルーリーダーを増やす、もしくはもっと早い時期からブルーフリーディング・サービスを開始するなど、システムの体制を整えて欲しい。
- 予約システムが、わかりづらい部分があった。
- まだきちんと書いていないと予約するのに気が引けた。
- スカイプで面談付きのブルーフリーディングを実施して欲しい。
- ブルーリーダーがメジャーに合わせて専門用語を理解しているとなおよい。

アドバイザーがAESを利用した教員のコメント

- 英語での執筆にチャレンジする意志のある学生にとっては、自分の論文に対して自信がもてるようになる有益なサービスだ。
- 今までアドバイザーが担っていた部分をブルーリーダーが指導してくれたことにより、アドヴ

アイザーとして論文そのものへの指導に力を注ぐことができた。

- すべての学生に受けさせて欲しい。また引用にはシカゴスタイルを使用して欲しい。
- 大変有益なサービスであり、卒論に取り組む学生へのサポートを具体的に行動で示していると思う。大学側がこのような配慮をしてくれることは嬉しい。
- 学生の中には、英語での執筆に追加でサポートが必要な学生がいる。
- ICUのバイリンガル教育には非常に重要なサービスである。
- 学生はライティングを上達させることができ、また英語卒論の質が上げれば大学全体としてもよい。
- ネイティブではないと教員によるチェックにも限界があるので、継続してほしいと思う。
- 英語の修正も、その分野についての知識がある程度ないと限界があると思った。できればその分野について知識がある人がチェックするようになった方がよい。
- 卒論は様々な形で他人の目にさらされることが必要。その観点からもAESは有効なサービスである。

AES利用学生およびアドバイザーが利用した教員のコメントは示唆を多く含んでおり、今後のシステム改善に役立つものである。

取り組むべき課題は数多くあるが、まず取り組むべきはブルーリーダーの安定的な確保だと考えている。卒論や修論の提出締切日が近づき、執筆が佳境を迎える時期にはAES利用希望者が集中し需要と供給のバランスがとれていない。潜在的な利用希望者のニーズに応えることが、英語での卒論執筆の支援につながり、卒論執筆率向上につながるはずである。まずは、多くの学生が利用できるように安定的なマンパワーの確保がAESの解決すべき当面の課題である。

さらに、大学でのアカデミック・ライティングの集大成として卒業論文があるとすると、卒業論文執筆以前の早い段階からブルーフリーディングを経験し、そこで受けた指導や学んだ経験を次の文書作成に活かし、最終段階に卒業論文があるというしくみを作れないだろうか。

今後、学生および教員の意見を収集・分析しAESサービスの見直しに取り組むたいと考えている。

セミナー研修レポート

マサチューセッツ州立大学ボストン校地域インクルージョン研究所主催 「日本の高等教育機関における障害学生支援に係るリーダー育成海外研修」 参加報告

番園 寛也
学修・教育センター

ICU では 1970 年代後半に視覚障がいのある学生が入学して以来、障がいのある学生が学ぶことのできる環境を徐々に整えてきました。その取り組みの成果もあり、障がいのある学生の入学、在籍数は、とりわけ障害者差別解消法施行の 2016 年以降、大きな増加を見せています。そうした状況の中での課題は、ユニバーサルな学修環境を提供できる体制のさらなる充実と障がいのある学生の卒業後を見据えたキャリア支援／移行支援体制の確立の大きく二つにあります。

こうした課題に対応するため、CTL では 2016 年度に University of Washington と Seattle Central College の視察を行うなど、海外の優良事例から学ぶ機会を積極的に設けてきました（参照：FD Newsletter Vol. 22）2017 年度から 2018 年度にかけては「日本の高等教育機関における障害学生支援に係るリーダー育成海外研修」に私、番園寛也と南和子の 2 名が第二期の研修生として参加しています。2018 年 6 月に行われる AHEAD JAPAN 大会での報告、8 月の最終報告書作成を残しており、また第三期の研修生へのサポートも含め、研修は今後も継続しますが、本稿ではこれまでの研修内容について ICU の取り組みに有益と思われる部分を中心に報告したいと思います。

研修の概要

研修は 2017 年 10 月 22 日から 27 日の米国ボストンでの現地研修および事前と事後のウェブセミナー、現地研修中に策定するアクションプランの実施と経過報告・フィードバックによって構成されています。ICU の他に、富山大学と名古屋大学から研修生としての参加がありました。いずれも障がい学生支援の分野で先進的な取り組みをしてきた大学であり、研修を通して実務担当者と交流し、問題意識を共有できたことは研修の大きな意義の一つでもありました。研修の主な内容は以下の通りです。

事前研修（4 回）：「米国における障害と高等教育に関する重要な法案と政策」「米国の高等教育機関におけるキャリアと雇用に焦点をあてた障害サ

ービス」「米国の高等教育における障害学生支援歴史と概要」「米国における障害苦情調査 入門編」「日本の高等教育機関における障害とキャリアサービス」

ボストン現地研修（5 日間）：「大学生のための自己決定とキャリア形成」「高等教育における学びのユニバーサルデザイン」「配慮：個人と大学全体」「タフツ大学 SAS (Student Accessibility Services) 訪問」「ノースイースタン大学 DRC (Disability Resource Center) 訪問と Co-op プログラムについての講義」「地域支援機関との連携：Massachusetts Rehabilitation Commission のスタッフによる講義」

事後研修（2 回）：「アクションプラン進捗報告及びフィードバック」「セルフアドボカシー」

研修を通して学んだこと

～権利を保障するインフラとしての障がい学生支援制度～

研修の中でもっとも強く実感したのは、米国の大学では障がい学生支援が例外的な特別措置ではなく、権利保障のためのインフラとして学内に整備され機能しているということでした。この背景には、「リハビリテーション法」と「障害のあるアメリカ人法（ADA）」という権利を保護するための差別禁止法があります。これらは大学など公共性が高い、あるいは連邦政府の資金援助を受けている事業者に対して、補助金停止などの罰則を伴う形で合理的配慮の不提供も含めた差別の禁止を義務付けています。

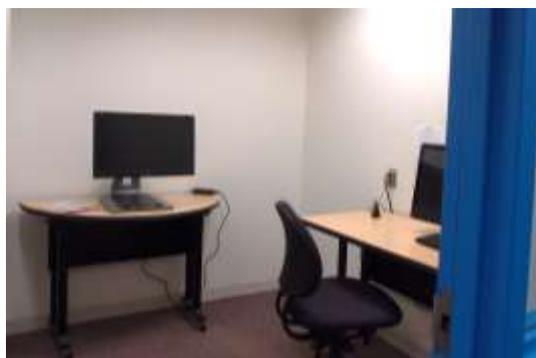
こうした法制度を前提に、各大学は障がい学生支援の制度を学内に構築し、スタッフを配置しています。そのなかでは支援の提供を担うコーディネーターとは別に、学生からの不服申立てを受け「ADA コーディネーター」と呼ばれる担当を設置して、学内の対応が適法に行われているかのモニタリングと是正を行っています。日本においても 2016 年に障害者差別解消法が施行され、ICU でも窓口が設置されていますが、まだ不服申立てに関する事例の蓄積が浅いこともあり、米国の制度運用と実務担当者の知見からは学ぶことが非常

に大きく、今後の検討課題が明確になりました。

～障がい学生支援の3つのアプローチ～

また、全学部生に占める障がい学生の割合が1%程度である日本と比較して、その割合が10%前後と高い米国の大学の支援体制は、支援学生数が増加傾向にあるICUの今後の取組みにとって有用な先行事例だと言えます。現地研修で視察したタフツ大学やノースイースタン大学など優良事例を持つ米国の大学では、こうした状況に対応するため、「合理的配慮の提供」「学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning: UDL）」「学生のセルフアドボカシースキルの育成」の3つの面からアプローチしています。

「合理的配慮の提供」については、教員への配慮依頼のオンライン化などコーディネート業務の効率化と配慮の提供自体を効率的に行うための環境整備があります。後者に関しては、試験時の配慮を提供するためのテストセンターの設置が挙げられます。試験時間の延長や別室（受験集中を妨げるものの少ない環境）の提供といった試験時の配慮が、ICUを含めた日本の大学でも一般的に行われていますが、障がい学生数の増加に伴い試験監督や別室を手配する負担が課題となっています。また、ICUで言えば、本館などで試験を実施する際に、延長された試験時間が他の学生の休憩時間と重なるため話し声や移動の音などが入ってしまい静穏な環境を用意するという本来の意義を損なう場合もあります。大学の規模なども異なるため、そのままICUに導入できるわけではありませんが、発想やテストセンターを設計する際に払われている注意などは非常に参考になります。



ノースイースタン大学のテストルーム。PCと視覚障がい学生用の拡大読書機、時計などを設置

「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」は、障がいだけでなく言語的背景や学習経験、興味・関心などの異なった多様な学習者（diverse learners）がアクセスできるように学習環境を設計

する思想を指しています。日英両語でのバイリンガル教育を掲げ、日本の中等教育を受けた学生以外にも多く在籍するICUにおいても有用な視点であるように思います。研修ではタフツ大学のStudent Accessibility ServiceのディレクターであるKirsten T. Behling氏よりUDL化を現実的に進めていくための方略についての講義があり、その中で特に印象に残っているのは、すでに学内でなされているUDL的な取り組みを見出すことと、完全な状態を目指すのではなく今あるものに一つ付け加える“plus one”アプローチの重要性が強調されていたことです。ICUでこれまで先生方が取り組まれてきた合理的配慮の提供を中心とする学生支援事例の調査とその結果を次の支援に活用するためのデータベースの作成に取り組んでいますが、今後UDLにかかわる取り組みについても事例を共有できるように検討を進めています。



タフツ大学のAT（支援技術）スペシャリストによるワークショップ

「学生のセルフアドボカシースキルの育成」については、ICUではこれから取り組む余地がまだある分野だと思われます。米国の実践で参考になったのは、学生が教員と話す場面でのどのように表現すれば自分に必要な配慮が得られるのか、などの具体的な問題設定をした学生向けの教材の作成・公開と個別のアドヴァイジングを組合せていることでした。また、それと同時に、学生がセルフアドボカシースキルを伸ばしていくためには、支援室スタッフや教職員がまず信頼できる聞き手であることが重要であり、そうしたきちんと聞き取られる環境の中で経験を積むことがセルフアドボカシーの育成につながるという意識を持っているように強く感じました。そのため学生へのアプローチに加えて、FDやSDに非常に力を入れており、支援室業務の中でアウトリーチに高いプライオリティが置かれていました。

アクションプランの作成と実施

今回の研修では研修生の所属先が直面する課題

への解決に向けたアクションプランを作成し、それを実践することがプログラムに組み込まれています。冒頭にも書きましたが、ICU は障がいのある学生数の増加とそれともなって、卒業を迎える学生も増えています。こうした現状に対応するため (1) キャリアサポート体制の確立 (2) 学生への学修支援体制の強化 (3) 教職員との連携強化のためのアウトリーチ、という 3 つのゴールを設定し、アクションプランを作成・実施しています。アクションプランとその実施状況・成果については別の機会に改めてご報告したいと思います。とりわけ (1) キャリアサポート体制の確立に関しては、就職相談グループに大きなご協力をいただき、連携しながら進めています。



アクションプラン発表

おわりに

紙幅の都合上、本稿では限られた点についてしか触れることができませんでしたが、研修で学んだことはこの他にも数多くあります。ICU 全体に還元できるよう今後取り組んでいきたいと考えていますが、研修内容についてご関心のある先生がいらっしゃいましたら、気軽にご連絡いただければ幸いです。

ICTを活用した授業支援（事例紹介）

浅野 あす香
学修・教育センター

OpenCourseWare (OCW) Massive Online Open Course (MOOC) など世界的な公開オンライン講座の広がりやスマートフォン・タブレット端末の普及により、「どこでも・いつでも・だれでも」手軽に動画が収録・閲覧できる環境が整い、本学の授業でもデジタル教材や、ICT ツールを活用する事例が増えていきます。

従来教室で行っていた講義をデジタル教材化して事前学習とすることで、ディスカッションやグループワークといったアクティブな活動のために講義時間を使うことが可能になります。また、学生の授業外学習時間の増加、教員の授業準備負担の軽減（デジタル教材を繰り返し使用することによる）といった効果も生まれます。Moodle や Google Classroom などの Learning management system (LMS) を使用し、Assignment や評定と組み合わせることも可能です。今回は実際に授業でどのように利用されているのか、活用事例とコンテンツ作成方法をご紹介します。

事例紹介

■ 事例 1 【事前学習】 演習課題

ANT212 “Demographic anthropology” (2017 Winter) Prof. Yoshie MORIKI

活用方法	授業内での時間確保が難しい『演習課題』を動画コンテンツ化し、事前学習課題とする。 1) 「演習課題」についてのコンテンツを作成 (Moodleに追加説明資料をUP) 2) Moodle Forumに回答を投稿
ツール	Cloud Campus / Moodle
受講学生数	61

■ 事例 2 【オンライン講義】

GES027 “New Media and Society in Everyday Life” (2017 Winter) Prof. Joo-Young JUNG



活用方法	オンライン講義用コンテンツの作成 1) Cloud Campusでオンライン講義を収録 → Moodleで公開 2) Assignment (オンライン授業の内容について設問を2つ) 提出
ツール	Cloud Campus / Moodle
受講学生数	70

■ 事例 3 【授業内課題】 グループプレゼンテーション

JPS101 “Introduction to Japan Studies” (2018S) Prof. Christopher BONDY



活用方法	“Pecha Kucha Video” ¹ の手法を用い、ランダムに分けられたグループごとにテーマを選択。授業時間内にスライド作成とナレーション録音する。Moodleで共有
ツール	Cloud Campus / Moodle
受講学生数	21 (ペアで10グループ)

¹ [“Good ICT Tools-iJapan: Flipping the Classroom, Interactive Learning and Japan Studies,” FDNewsletter 21, no 2 \(March 2017\)](#)

【その他活用事例】

- 語学講義での発音復習用コンテンツ
- 英語開講授業のサポートコンテンツ

実際に授業で利用された先生の声

人類学エリアメジャー科目の「人口人類学」では人口学と人類学の内容をカバーするため、テクニカルな内容をいつ・どのように伝達するかという点が授業運営上のチャレンジになっていました。例えば、合計特殊出生率（TFR）という指標があります。日本の超低出生の原因を理解し、その文化的意味を考えるためには、単に定義を知るだけでなく、個々の学生が実際に手を動かして出生率を計算してみることが大切です。とはいえ、大教室の授業で計算から意味の検討まで行う時間を確保するのは難しいのが現実でした。そこで今回、「反転授業」を導入して、私が指標の紹介と計算方法&データの説明をしたビデオ映像を Moodle 上に掲載し、学生は授業前に視聴して TFR を計算し、数値を Moodle 上に投稿するという課題を試みました。反転授業にすることで、計算の部分は学生個人のタイミングで行い（エクセルを使用する人も地道に鉛筆で計算する人もいました）、授業内では人類学の観点からの全体での議論に十分な時間を配分することが出来ました。映像に自身の姿が残る恥ずかしさはありませんが、成果については満足していますので来年度も使用したいと考えています。

(社会・文化・メディア デパートメント/森木 美恵)

2018 年の冬学期に開講された「New Media and Society in Everyday Life」という一般教養科目において、Cloud Campus を活用して反転授業用に講義の 1 つを録画しました。講義の内容は、コミュニケーションテクノロジーと社会の関係性を理解するための 2 つの主な考え方である、技術決定論と技術の社会的形成論についてです。この授業において、この 2 つの考え方を学生に理解してもらうことが非常に重要であるため、十分な時間をかけて考え方についてのディスカッションを行い、日常生活の例に当てはめて説明したいと思っていました。しかし授業時間には限りがあるため、反転授業を導入することに決めました。オフィスで、パワーポイントスライドを画面の横側に表示した 40 分の講義を録画したのですが、この際に、講義の録画方法と Moodle へのリンク方法についての詳細な手順を Center for Teaching and Learning オフィスから教えて頂いたことで、とてもスムーズに行うことができました。学生には、通常の授業の前にこの講義を視聴した上で、このオンライン講義についてのコメントや質問を Moodle に投稿するよう指示しました。オンライン講義後の授業では、学生から寄せられたコメントや質問を複数共有し、また生産的なクラスディスカッションに繋がるようなディスカッションクエストを複数挙げました。質疑応答やディスカッションの時間に授業時間を最大限活用したい方には、反転授業をぜひお勧めします。特に、比較的抽象的な理論やコンセプトを教えている場合は、事前に講義を見てもらい、授業時間を使用してその理論やコンセプトを実例に当てはめていく方が効果があります。

(社会・文化・メディア デパートメント/鄭 朱泳)

(日本語訳：CTL)

オンラインコンテンツ作成サポート

コンテンツ作成の相談 & ツールの選定

コンテンツ収録 & 共有

コンテンツを公開 = 授業で活用

動画 アンケート 小テスト

Center for Teaching and Learning

Moodle@ICU

Google Drive

YouTube

コンテンツ作成方法

1) Web アプリケーション

カメラ付き PC または Web カメラを接続した PC とインターネット接続があれば、場所を選ばずコンテンツを作成できます。収録ビデオは Moodle で共有・閲覧が可能です。

ICU では、Cloud Campus Web 教材作成アプリケーションを使用し、PDF + 映像 + 音声を収録する環境をご用意しています。

参照) [“Flipping’ a Classroom,” FD Newsletter 21, no 2 \(March 2017\)](#)

2) スクリーンキャプチャーソフト + 映像・音声収録

Mac の QuickTime やヘルプデスク貸出 PC (Windows) にインストールされているスクリーンキャプチャーソフトを利用して収録する方法です。PC に収録動画が保存されるため（保存形式選択可能）、Google Drive での共有や Web サイトへの公開など、汎用的に利用することができます。

また、PPT 上に作成したテキストを PC の読み上げ機能で（日・英 対応）再生し、音声収録をすることも可能です。

3) iPad スクリーンキャプチャー + 音声収録

iPad に標準搭載されているスクリーンキャプチャー機能を使用してコンテンツを作成する方法です。画面に資料を表示しながら、音声を収録することができ Google Drive へのアップロードや共有が簡単にできます。



最後に

動画コンテンツを取り巻く環境は、大きく変化しており、より使いやすく機能的な新しいツールもリリースされています。学修・教育センターでは、利用シーンや活用方法にあわせて、最適なツールをご紹介します。また、コンテンツ作成時に使用できる“著作権フリー”の素材集なども紹介しております。ご興味がありましたら、オスマー 1 階学修・教育センターまでご相談ください。

[CTL-Web] 著作権フリーの素材（リンク集）

<https://sites.google.com/a/info.icu.ac.jp/ctl/services/edu-support/policies-and/copyright-j/copyright-free-j>

編集後記

2018 年度春夏号をお届けします。このニュースレターがお手元に届く頃は、春学期もほぼ終わる頃と思います。

巻頭の記事で学修・教育センターの図書館移転が取り上げられました。当事者であった図書館スタッフと学修・教育センタースタッフにとって、春学期はカオスのなかにはありました。変化は時として混乱を引き起こしますが、未来の扉を開くには思い切った舵きりが必要なのだと、カオスの中にいたスタッフの一員として強く感じました。

学修・教育センターが図書館に移転したことで学生や教員の学びへの取り組みの現場をリアルタイムで見られるようになりました。それにより、困りごとが可視化され支援がしやすくなったと感じるのは、私ひとりではないと思っています。ハード面での準備は整った今、次に焦点化すべきはソフト面での連携・協働です。どのような支援が必要なのか、効果的な支援のために何をすべきか、皆さんからの率直なご意見、アドバイスを頂きながら、新たなステージを目指していきます。ご協力いただけると幸いです。

記事または CTL に関するご意見、ご感想などありましたらお気軽に、ctl@icu.ac.jp までお寄せください。ニュースレターへのご投稿ももちろんお待ちしております。

南 和子
学修・教育センター

Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University

Othmer Library 1F 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan
Phone: (0422) 33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp
